

〈資料紹介〉 京都大学文学研究科図書館寿岳文庫蔵「古則聞書零本」翻刻・解説

山 本 佐 和 子

解 説

○書誌 元和八（一六二二）年写 存一冊（元は二冊か）
種類 禪籍抄物（密参録）。

形態 仮綴。

外題 なし。表紙左端に「古派／喝堂乾」とある。

内題 なし。冒頭（一才）「元和八歳正月念三日此古則初也 歳十

九歳」とある。

寸法 縦二三・七糎 横一七・七糎。

丁数 一五丁（墨付一三・五丁）。

表紙 本文共紙（原裝表紙）。

奥書 なし。

備考 京都大学文学研究科図書館所蔵（請求記号…国文二寿岳文庫

＝7c＝16。

『向日庵抄物集 上巻』（清文堂出版、一九八七年）に影印所収。飯塚（一九九五）に、第一則（一才〜4才）の翻刻がある。

本文献「古則聞書零本」は、飯塚大展氏が一連の研究で初めてその実態を明らかにされた「大徳寺派系密参録」に類する^①。飯塚氏による同派密参録の分類で〈百則密参録〉、〈碧巖類則密参録〉、〈百五十則密参録〉等に収められる古則公案のうちの五則、①趙州栢樹（〈百則密参録〉の第一則、以下同）、②郎中地獄（第四則）、③萬法不侶（第二則）、④見明星（第二六則）、⑤聞擊竹（第四〇則）について、問答での発話（師家の「拶語」と学人の「下語」・「弁」と、発話の文言や他の宗派・寺院との差異についての解説が筆記されたものである。

「密參禪」とは、中世日本の禪宗において、林下(官寺である臨濟宗五山派に含まれない、臨濟宗大徳寺派・妙心寺派・幻住派や曹洞宗)から広まり、後に五山叢林まで広く行われた參禪の方法で、入室參禪の問答を類型化して、「型にはまった、印可証明をもらえらるような問答(玉村一九九一)、「模範解答のパターン」(飯塚一九九五)の口訣伝授を受けることが參禪そのものとなった状態をいう(鈴木一九六八、玉村一九九一など参照)。「密參錄(密參帳・密參覚帳・行巻とも)や、曹洞宗では「門參」(本參・秘參・伝參・秘書)と呼ばれる文献は、口訣伝授される内容を記した文献である。

禪宗の教義に関わる内容の抄物(禪籍抄物、禪門抄物等と呼ばれる)の中では、最も多くの伝本が現存するといわれている(石川二〇〇一)。

近世以降、密參禪のような參禪の在り方は強く否定されたため、禪宗史研究では殆ど顧みられなかったが、金田(一九七六)による密參錄の研究など日本語学の抄物研究が契機となつて、近年、禪籍抄物を資料とした中世から近世初頭の禪宗史研究が盛んに行われるようになってきている(石川二〇〇一、前掲飯塚論文、安藤二〇一一年など)。本文献「古則聞書零本」も、影印刊行時には、「碧巖錄抄」「無門関抄」のような「語録抄」(禪宗典籍類の注釈書)の草稿とされてきたが、飯塚(一九九五)によつて密參錄の一例であることが

明らかになった。

今回、すでに影印が公刊されており、一部翻刻もなされている本文献について改めて資料紹介を思い立ったのは、影印で判読できない修正前の文字が、実物では凡そ判読可能なことに加えて、次の三点、密參錄を原典とする講義録であること、旧仏教系論義資料と共通点をもつこと、禪問答と他の文芸との関連性を示す内容が認められること、を見出したからである。以下、翻刻して気づいたことを少しく述べる。

(一) 密參錄を原典とする講義録

密參錄は、口訣伝授される問答での発話内容を、演劇の台本のように記したものが一般的である。しかし、本文献「古則聞書零本」は、その密參錄を原典(注釈対象の典籍)として、それを説明した言葉までを口訣のように筆録している点で特異である。

このことが端的に分かるのが、問答の発話を直接引用で示すことや、当該箇所用いられる「下語」が二つあるといった指示である。挙例では、問答の発話を「」で括って示している。

- (1) a. 又和尚ヨリ「意ハ無ガ寒暑悲歡ハアルゾ。弁シテ来レ」ト云ゾ。(一才⑥)
- b. 「過去ト云者ハ無者テ候」トヘンスルゾ。(一才⑫)

c. サテ師曰「アギヨ（下語）シ来レ」云。答テ曰「柳緑花紅」ト云句ツクソ。
(2ウ④)

(2) a. 下語「充塞乾坤」又、「亘古亘今」トモ二句ツクソ。

(12ウ④)

b. 真エキ再返アレトモ、事ナカイ事、マツ是レテスムソ。

(13オ④)

一般的な密參録では、誰の言葉か分れば事足りるので、各発話の冒頭に「師曰／師拶曰」や「下語二」「弁二」等はずくが、終わりに「ト云ゾ」等はずかない。また、(2) bは、講師が「請益（しんえき。実際に行われた參禪の記録）がもういつペンあるが、長々しし、さしあたりこれでよからう」と述べたものである。密參録には、模範的な問答のほかに、見習うべき先例である「請益」を添えたものが多く、このような例から、本文献が何らかの密參録を原典にしていることが推測できる。

密參録の中には、先行の密參録を集成、整理したものも存する。

ただ、この「古則聞書零本」はそれらとは異なって、口頭での講義を経ていることを窺わせる事象が複数認められる。夙に、影印の解説・解題でも「講義の聞書きそのもの」という指摘がある。

ひとつは、書写者が、当該の語を知らずに、語形（音）に自分の知っている漢字や字音語から適当なものを当てはめたと思われる例

が多数見られることである。今回、翻刻・語釈が一番難しかったのがこれらの例であった。

(3) a. 過去身不可得、現在身不可得、未来身不可得

(1ウ⑤…心)

b. 須龍言經

(3オ⑨…首楞嚴經)

c. 西明寺殿

(3ウ⑤…最明寺殿)

d. 色想(3ウ⑫…色相、10ウ等)／色草

(7ウ③…同)

e. 風花節月

(5オ⑧…風花雪月)

また、本文献に多い重ね書きによる修正は、殆どが字音語や書き下し文のカナ書きを後で漢字や漢文に直した(4)や、宛て字・誤字を後で正しい漢字に直した(5)のような例である。(現)は修正後の現状、(二元)は修正前である。

(4) a. (現) 執心執着／(元) シウ心シウシヤク (2オ②)

b. (現) 芥子斗モ不可起／(元) ケシホトモスヘカラス

(3オ⑧)

c. (現) 本分／(元) ホン分 (4オ④)

(5) (現) 有相法身、無相法身／(元) 有想法身、無想法身

(11オ⑥)

禅籍抄物は刊本でも宛て字を多用することで知られるが、(3)に加えて(4)・(5)の修正例があることを考えると、(3)についても書写者が語

形から正しい表記に思い至らなかった故の表記のように思われる。

このほか、他の宗派・寺院との比較や、それらへの批判が見られる。

(6) a. マタ本分上ニサタマラヌ処テ、口テハ截断■面ニスレトモ、心カセヌニヨツ(七)、日マチ日マチヲ洞家ニハスル。五山ナトハ、ハヤイツカウノ無眼僧シヤ。(10ウ)

b. ソウ道(注・曹洞)ノヤウニ見レハ、イキイル内ニ、出離シヤウ用ハナイソ。(7オ③)

口訣を記す密参録で、他の宗派・寺院に対する悪口は不要のほずで、聞き手を飽きさせない工夫でもあろう。「古則問書零本」は、問答の内容ではなく、比較や批判の対象となつてゐる宗派・寺院を除くだけで、消去法で大徳寺派のものと分かるユニークな内容を持つ。

本文献の右のような状態は、「初学者のあり様を生き生きと伝える」(飯塚一九九五)と言われるように、講義の要点と余談を区別する余裕もなく、講師の発言を一言一句聞き落とさないよう記録する、書写者の様子を伝えているように思う。かなりの乱筆拙筆で、右に見たような文字使用の状態だが、脱字は不思議と少ない。

教義の基本用語の表記も覚束ないのは、現代の感覚ではやや心配にもなる。しかし、書写者の十九歳の正月という年齢は、喝食として年長者に愛され、遊興にふけることができた時期を過ぎつつある

年頃である(今泉二〇一〇など、参照)。見方を変えれば、当時の参禅において、例えば漢文の素読と同じように、音声の習得が内容の理解より優先されていたことを示しているように思われる。(三)との関わりで注意したい点である。

(二) 密参録と論義資料との共通点

密参録の中に、本文献「古則問書零本」のように、初学者・若年者が宗派の教義を問答体(師家からの問いと自らの答えの形式)で習得するために個人的に作成したものがあつることから想起されるのが、天台宗・真言宗・華嚴宗等に伝存する「論義資料」である。^⑤

「論義」はこれらの宗派における教義問答をいう。論義資料にも、初学者が問答を習得するために個人的に作成したものが含まれてい^⑥る。この種の個人の学習のためのノートは、通常の文献より言語規範による制約が少ないことが予想され、作成時期が特定できる作成者自筆の文献であることも言語資料としては貴重である。

加えて、本来、教義に関する専門家同士の討議だったものが、在家の信者に参観されるものとなる点でも、論義と中世の禅問答は共通する。論義は法華八講などの法会の中で儀礼の一環として行われることがある。禅問答も中世には追善供養として行われる場合があつたことが知られている。禅問答が人に見せるものになつたことは、

問答の内容や作法に何らかの影響を及ぼしたと考えられ、これも、次の(三)との関わりで注目される。

(三) 「趙州栢樹」と狂言「鹿狩」との連関

一則目「趙州栢樹」の公案の間答の中には、二首の和歌(道歌)が引用されている。

(7) a. 桜木ヲクダキテ見レハ色(花ノナニモ) ナシ花ヲハ春ノ空
(園ノ風) ソモツラン

b. 年々の吉野々山ノ桜花木ヲワリテ見ヨ花ノアルカワ

(a、bとも3ウ、括弧内は異文の注記)

歌の直後には、「又妙心寺ナトテハ、古則くニ歌カツク。然ガ当寺テハヲホカ付古則無ソ。マツ此古則ニツクソ(妙心寺などでは古則ごとに歌が付く。しかし、この大徳寺では謳歌が付く古則はない。ただこの古則だけは付くのだ)」という説明がある。

前掲の飯塚氏の研究で数多く翻刻・紹介される大徳寺派系密参録の中で、右二首のうち一首目は、「最明寺殿」北条時頼の作として、「趙州栢樹」の間答の中でしばしば引用されている。しかし、二首目の吉野山の桜を詠んだ歌を引用する密参録は少なく、類歌が確認できたのは、「古則聞書零本」と同じく初学者が〈百則密参録〉中の教則を習得した記録とされる、次の「龍岳和尚密参録」(松ヶ岡

文庫蔵クハ一八六九一二)のみであった。

(8) 春ゴトニニヲフ吉野ノ山桜木ヲ破リミヨ花ノアルカハ

(龍岳和尚密参録・飯塚一九九四b)

この吉野山の桜の歌が、禅僧が登場人物の狂言「鹿狩」(現行曲「左近三郎」)の中で重要な要素として用いられている。次は、禅僧と狩人が殺生の是非を巡って問答し、最後に狩人が僧に弓を向ける場面である。

(9) 僧「射る事はなるまひぞ。胸には三寸の弥陀が有ぞ」

左近三郎「弥陀があらば、割つてみよ」

僧「待てしばし」年ごとに咲くや吉野の山桜 木を割りてみよ

花のあるかは」と聞く時は、割つたりと花はあるまひぞ」

(狂言記・巻一「鹿狩」)

このあと、狩人の左近三郎が「目の前に有、これは花(鼻)ではないか」と切り返して、オチとなる。

狂言「鹿狩」の形成については、橋本(一九八五)に詳細な考察があり、僧と左近三郎の間答で用いられる引用句の殆どが仏教、中でも禅宗に典故をもつものであり、僧侶が作成に関与した可能性が指摘されている。右に見たように、劇中で鍵となる道歌が、本文献を含む大徳寺派系の〈百則密参録〉第一則の間答で用いられた歌であることは、この指摘を裏付けるものとなる。さらに言えば、狂言

「鹿狩」の禪僧と狩人の緊迫しつつも中身の無い問答は、密参禅そのものを風刺しているという見方もできるように思われる。

このほか、芸能との関連性を示すものとして、三則目「萬法不侶」の間答中の、「シカタ（仕方）、すなわち、「それぞれの場に対応した身ぶり手ぶりなど特定の所作」（時代別国語大辞典 室町時代編）「しかた」を伴って語る、という指示が注目される。

(10) 洞家ナトニハ、イロくシカタ有テ歌ナトヲ、ケレトモ、当家ニハ、是ハカリニシカタアルソ。手ヲニキツテ、是ヲ弁云也。

(8ウ、行間の書入れ)

このあと、師家と学人が共に拳を振り回す身ぶりを伴いながら、短い応酬を繰り返す。(10)の「洞家等には色々『仕方』あって：」は、当時、能・狂言の「仕方話」のような禅問答が存したことを窺わせる。

今後の課題

現在、日本語史の資料（史料）として広く用いられている「抄物」は、五山叢林の禪僧や博士家の公家が経書、史書や文学書の注釈書として編んだものである。林下の禪僧が作成するのは主に禅籍抄物で、日本語史資料としては、曹洞宗の僧侶が作ったものの一部が東国語資料として利用されるに留まっている。

本文献「古則聞書零本」を含む臨済宗大徳寺派・妙心寺派の禅籍抄物は、五山・博士家系抄物の文体が固定化した後の安土桃山期・近世初期の中央語の一端を観察できる資料となる可能性がある。また、密参録には、初学者が個人用に筆録したものが伝存する点で、内容面・言語面ともに、他者に伝えるための文献では整理されてしまうものが書き留められている可能性も高い。

今回取ってやや無謀な資料紹介と翻刻を試みたのは、この種の文献の発掘・保存と研究の進展の一助となればと考えたからである。稿者は、本文献の書写者以上に禅宗の教義に疎いため、翻刻・解説とも誤りも多いと思われる。大方のご批正をお願いしたい。

注

- ① 飯塚大展氏「大徳寺派系密参録について」(二)～(九)。参考文献には、本文中に言及したものを掲げる。
- ② 公案の名称は、〈百則密参録〉に掲げる。
- ③ 石川(二〇〇一)は、曹洞宗の禅籍抄物「洞門抄物」を内容から、「語録抄」「代語」「代語抄・再吟」「門参(密参録)」「切紙」に分類している。
- ④ 稿者は平成二十九年度訓点語学会抄物講習会(八月二十三日於京都大学文学部)における本文献の展覧の準備のため、実物を調査する機会を得た。
- ⑤ 論義資料に関する先行研究や言語的特性は、石井(一九九〇・一九九一)に詳しい。

⑥ 稿者は、論義資料については、東大寺図書館所蔵の華嚴宗のものを写真で確認したに過ぎないが、書物の形状（大きさ、枳形に近いこと、簡易な装丁であること等）も、本文献と似通っているように思われる。

使用したテキスト

○狂言記：『新日本古典文学大系』（岩波書店） ○日葡：土井忠生・森田武・長雨実『邦訳日葡辞書』（岩波書店） ○史記桃源抄：『抄物資料集成 第一巻』（清文堂）

参考文献

- 安藤嘉則（二〇一）『中世禅宗における公案禅の研究』国書刊行会
石井行雄（一九九〇・一九九一）『東大寺図書館蔵『華嚴経論義』の用語（Ⅰ）』（同（Ⅱ）『暁大論文集』41・42
今泉淑夫（二〇一〇）『禅僧たちの室町時代——中世禅林ものがたり』吉川弘文館
飯塚大展（一九九四a）『大徳寺派系密参録について①——『雲門録百則』を中心にして——』『宗学研究』36
——（一九九四b）『大徳寺派系密参録について（三）——『碧巖録龍嶽和尚秘弁』を中心に——』『曹洞宗研究員研究紀要』25
——（一九九五）『大徳寺派系密参録について（五）——『百則密参録』を中心にして——』『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』28
——（二〇〇一）『大徳寺派系密参録について（六）——駒澤大学図書館蔵『百則』・『五十則』の翻刻——』『駒澤大学仏教学研究紀要』59
——（二〇〇二）『大徳寺派系密参録について（七）——『五十則』の公案集をめぐって——』『駒澤大学仏教学研究紀要』60

翻刻・解説

石川力山（二〇〇二）『禅宗相伝資料の研究（上）・（下）』法蔵館

金田弘（一九七六）『洞門抄物と国語研究』桜楓社

鈴木大拙（一九六八）『鈴木大拙全集・第一巻 禅思想史研究』岩波書店

玉村竹二（一九九二）『臨濟宗史』春秋社

橋本朝生（一九八五）『鹿狩』の形成と展開』『能 研究と評論』13

〔付記〕 貴重な文献の調査、翻刻掲載をご許可下さいました京都大学文学研究科図書館に、記して感謝申しあげます。

また、解説は、第十四回論義資料研究会（平成二九年九月一〇日於同志社大学）での発表を元に大幅に加筆修正したものです。席上、参加者の皆様から貴重なご意見を賜りました。翻刻に関しては、京都女子大学文学部講師・山中延之氏にご教示頂きました。解説・翻刻の誤脱等は全て稿者の責任です。

本研究は、JSPS 科研費 JP17K13464 の助成を受けたものです。

翻刻

○凡例

- ・改行、仮名遣い、濁点の使用、平仮名の混用は底本に従った。
- ・傍記は底本にできるだけ近い形で示した。

- ・脱文を行間への書入れて補った箇所は、本文中の適当な個所に「※補入……」として挿入した。

- ・漢字は通行の字体を用い、新旧の字体が大きく異なる漢字（「佛・仏」「声・聲」など）は底本に近い字体を採用した。

- ・漢文部分の訓点は、底本のもので示した。

- ・底本にある補助符号は、類似した「△」「○」「□」等で示した。

- ・翻刻に際し、読解の補助となるよう句読点を適宜加えた。

- ・本文献には、公案が五則収められる。各則の冒頭に《**闕名称**》を付した。

- 修正・抹消等の扱いについて…本文献は、本文同筆の重ね書きによる修正や、墨筆の塗りつぶしによる抹消（墨滅）が多い。欠損・虫損も多いため、これらを便宜上、左記の方法で示した。

- ・重ね書きは、傍訓【】内に修正前の文字を示した。【】内の□は元の文字が読めない部分である。

- ・墨滅は、抹消前の文字が判読可能な限り翻字し、上に二重取り消

し線を引いた。

- ・墨滅や乱筆で判読できない字は□で示した。

- ・難読字は「」で囲み、上に「？」を付した。

- ・破損や虫損による欠字は■で示し、字の一部から推測できる場合は傍訓で示した。

- 注について…修正・欠損箇所での右の方法では示しにくい状態の場合、および、字音語の仮名書き・宛て字・誤字などで特に意味のとりにくい語句について注記した。

（1才）元和八歳正月念三■此古則初也 歳十九歳

《①趙州栢樹》△「僧問、趙州如何是祖師西来意」達磨天竺

ヨリ来故、祖師トト言ソ。唐カラ天竺ハ西也。

「意無ト弁スルソ。無故如何、和尚云也。頭上脚下

マテ尋テモ、無骨肉筋廿五ザウ六フハ^臍

アレト意無。是カ縦■也。①「又和尚ヨリ、意ハ無

ガ寒暑悲歡ハアルゾ。弁シテ来レト云ゾ。「寒暑

悲歡ト云意、非有非無、似有無、[?]師傳」ノペン也。^弁

如有如無トモ和尚^{師家}ニ依テヘンスルソ。サテ句ガツクゾ。

意如^二水中月^一猶^二鏡上之影^一、如^レ応^二谷響^一

如^二鐘^一在^レカ扣^二ト云四句ツクゾ。「過去現在未来^去

「過去ト云者ハ無著テ候トヘンスルソ。又現在如何

(1ウ)ト和尚サツスルソ。「現在小者似レ有無キ者也

有無ニ無ニヲチツクソ。此サキノ意ノ心ト同事ソ。

サテ又和尚ヨリ、未來如何トサツスルソ。「未來身^③

無キ者テ候トヘンスルソ。是、句カツクソ。

金剛經云、過去身不可得、現在身

不可得、未來身不可得、三世不可得

ト此事ヲ云ソ。又三世無心トモ云ソ。

サテ長老ヨリ、三世不可得ニシテ後

如何、ヒツキヤウ不可得テハスムマイホト

ニ此上ヲ如何トサツシ有ソ。「是ハ輪

廻^④セマイトノ事ソトヘンスルソ。サテ意■

(2才) 生心種々法生滅心種々法滅

ナケレハ執^{〔シウ シウシヤク〕}心執着モ、アラウヤウカアツテコソ、

意無ホトニ、リンネハナイソトヘンスルソ。コ、二句カ

ツクソ。生心種々法生、滅^レ心種々ノ法滅ト云句ソ。

又此句モツクソ。心有^{時ハ}曠劫ニ受^チ沈淪^ヲ心無^{時ハ}刹利^ガ

那^ニ、成^正覚^トハ、此句ハ武帝之子ノ照名大師

之達磨^{西死シテ}○之碑ヲシテ、其上ニ書タ句ソ。サテ

師云底前栢樹子「草木花毛似有無候ト

ヘンスルソ。祖師西来之意テ候ト云ソ。サテナント

シテカ無ト云ソ、ヘンジテ来ト長老云ソ。「栢樹子

無ト云テ候処ハ、春ハ花開、夏ハ長シ、秋子ノ^④

リ、冬葉落。サウヘツ草木ノタグイヲ、根

(2ウ) 茎枝葉ヲウツクタイテ見トモ、花カトレ

カ有トハ見ヘヌホトニ無ト見タ。是ヲ以テ

意ト同事ソ。有似無処以テ、答曰ニシラレ

タソ。サテ師曰、アギヨシ来レ云。「答テ曰、柳緑

花紅ト云句ツクソ。底前栢樹子ハカリ

テハナイソ。ソウヘツノ草木ノコトナレト

底^⑥ニ有タニ依テ栢ト云タソ。サテ

ナニトテ柳緑花紅ト云ソ。オキヲヘンジテ

来レト師ノ曰。「此次サイハ、春ハ花サキ、秋ハミ

ノルニ、ウチクタイ見ハ、ナンノドウリモナキニ依テ

ツケテ候トヘンスルゾ。サオハクジユク□□シヤキ

トサセシガタトト歌□語ヲ有ソ。

(3才) 木根木サククキチ見小色モ無花ヲ小春ノソサシモ■ナル

西明寺殿御作

又妙心寺ナドオ小古則トト歌ヲヒクト聞トモ、当寺オ小

歌ヲヒク古則トトカ無。マオ此句ト此歌ト首ツク

サチ栢樹子ヲモチイタ上カラハ、オチトモチ申サント師申

答申

△サテ龍儒尊者ノ語有ソ。ムシロノ聲○有ノ見ヲ起ス事ヲハ、如ニ

須弥山ノスルトモ、空見ヲハ本芥子斗モ不可ケンバカリ起スト云ソ。

須龍言経⑨ニ有ソ。又空見ズ断見無見三ツ也。

即チ是ハ有見ハ栢樹之凡夫【俗】ノシワサナレトモ、有ノ見ハ

※補入…イカホトシテモヨイ。空見ハ

佛モイラス、神モ又ナト、ト糞シカケイノナト、云テ

ヨイモノカ。今日ノ上テハ、一段動行シテ、ヨク

(3ウ) 佛神ヲマツ、タカヨイソ。有ノ見ハ、空見ヨリモマサ

レリト見ソ。サテ此句、ハク儒之ホンプニシラシ

メンカ為ニ歌有ソ。

桜木ヲクダギテ見レハ、色【ナニモ】モナシ花ヲハ春ノソラソモツラン【風】⑩

西明寺殿歌

△年々の吉野々山ノ桜花【ニ】木ヲワリテ見ヨ花の

アルカワ

又妙心寺ナトテハ、古則くニ歌カツク。然ガ当寺テハ

ヲホカ【付】古則無キノ。マツ此古則ニツクソ。サテ

師曰、栢樹子ヲモチイタ其上ニハ、ナニトモチユウソ

ト云ソ。「答曰、僧ハ是僧、俗ハ是俗テ候ト用ユウソ。」

今日ノ上テハ、色【ソウ】想ヲシテ有可様之受用テ候ト

ヘンスルソ。ナニモシラヌ参■モシラヌ□カシヌレハイ■

(4オ) 又ヤケハハイトナル土トナルトテ、ナニモウチヤフル事■

正見之者ハ、無事ハ無、有ル事ハ有ト見、邪見【ヤ】ノ

者ハ有事モ無ト見タリ、無事モ有ト見タリスル

ソ。本【ホシ】分之者ハ、僧ハ僧、俗ハ俗ト見テ、今日之

上、受用テ候トヘンスルソ。

〔空白〕

《②郎中地獄》地獄畜鬼道修生一人道天道修羅道

(4ウ) 崔郎中問趙州云、大善知識、還入地獄也否⑮

師曰地獄ト云者ハトノ方ニアルソ、ヘンジ来レ云。「答曰、三界

ガ皆地獄テ候トモ、人間ノアタリカ地獄候トモヘンスルソ。

畜鬼道如何ト師曰。「答曰、畜鬼ト云ハ材宝有

テモノニ■ホシイ、カ、ホシイ、ニナカクイタイナド、テ

思者カ皆ガキ也。サテ、有材畜鬼、無材畜鬼

トテニツアルソ。有材一ハ者「?思」事、無材ハコヂ

キ、ヒ人ノ事ソ。師曰、チク生道如何。「答曰、人間ト

生シテ五上ノカケタ者ヲチク生ト云ソ。師曰、

修羅道如何。「答曰、アケカ、イコンモナイニ、テキミカタ

ナレハ父ヲ子ガコロシ、子ヲ父ガコロシ、人トタ

(5才) 公ノクビモウチスル修羅テ候トヘンスルソ。コレデ

ニバカリ修羅カアツテヘニハナイカト云。一身ニイカリ

ヲ入ルカ修羅テ候トヘンスルソ。一身カ、ムカトハラカタ

ハケンクワシ、我ガ僕来ヲシカルガ修羅テ候ゾ。

師曰、人道如何。「答曰、アラユルチク生ハラ、ケレトモ

五ゼウ色ソウヲタツルヲ人道ト云ソ。師曰、

天道如何。「答曰、王位ヲ天道テ候。王位ト云者

ハ風花節月ノ如、ヘツニコハイ者ハナシ、意アリ

タイマ、ナ者テ、佛法もシラネトモ一身ノ楽

テ候トヘンスルソ。一家ノ主人カ天道テ候

トモ、主人ハ其一家テハ、アリタイマテアル

トコロヲ以テ云ソ。師曰六道ノヒツケヤウ

(5ウ) 如何。「答曰、ヒツキヤウ六道ハ、天道カゴクラク

シヤ、人道カコクラクシヤト云事モ無。カク道カ

カクシヤト云事モ無。天道モカク道モ

皆、生ヲウケテ来ルハ、皆六道ヲ

ウケテ候トノヘン也。※補入「下語、三界無安、猶如火宅」△師曰、

崔郎中間

趙州云、大善知識、還入地獄也否

コ、ニ下語シ来。「答曰、問得テ始テ可レ得、

此句之心ハ、崔郎中ガ趙州ニ始問テ知得

タト云心也。師云、趙州云、末上ニ入。下語

シ来。末上入トハマツサカサマニ入ト云

(6才) 又、マハジメニト云心ト二色有也。下語

答曰、耳朶両片皮、牙齒一具□乎。師曰、郎

中云、既是善知識、為什麼入地獄、州云

老僧若不入地獄、争見崔郎中。下語

来。「答曰、漏逗不レ少カラ。衫穿肘露。

漏逗一ト云心ハ、崔郎中ガ趙州ニ問ハ、

既是善知識入地獄ト云タ処テ、趙州ノ

老僧若不入地獄、見崔郎中トイハレタハ

趙州モ末上入トテ、崔郎中□始カラ

入タソ。地獄イランスンハ、崔郎中モミマイ

ソ。慈悲ニ趙州ノ入地獄ニ入テ、崔郎

(6ウ) 中ニ漏逗不レ少シテ、シメサレタソ。衫穿

肘露ハ、衫カヌケタレハ、ヒヂノ出タヤウニ

アラハル、ソト云心也。サテ是ヲ前二見ヘテ

地獄ヲアト二見スルモアレトモ、是ヲアト二見スレハ
カテンユカン処テ、アト二見スルソ。俗人ナトニ

ハ漏^ル一^ノ衫^ヲ一^ノナトハ見セヌケナソ。

サテ今マテハ地獄一見ソ。地獄ニ入タ

ハカリテ、地獄カラ出ヤウハナイソ。地獄ニ

入タフンテモスムマイホトニ、出離之時

如何ト師家カラサツスルソ。「答曰、色ソウ

ヲセツダンシテ、皆地獄モナニモイタツラ

(7才) 見タカ出離^ニ候^ニ云。当家ノヘン

ソウ道^⑩ニハ生ヲ入地獄、死ヲ出離^ト見

ルソ。是ホトチカウタ事也。ソウ道ノ

ヤウニ見レハ、イキイル内ニ、出離シヤウ

用ハナイソ。是レホトチカウタソ。コ、下^ニ

語有。■事ト云ソ。閑事ライタツラ

事ト読也。師曰、ナンノ用ニ地獄ヲコマ

カニ六道ノナンノトテ、ハケニ見スルハ

ナンノ用テアルソ。ヘンシテ来^ル「答曰、チク

セウ道ヲ、センニ用サセウカ為デ候。六道

テモ、イナ者ヲ云ソ。師曰、何シテカチク生

道ヲ用ルト云ソ。ヘンシテ来。答曰、チク生

(7ウ) センニ用タハ、シヤウルイチク類ハカリテハナイソ。

人義五状ヲシラス者カ、人テモチクセウナリ。

チクセウ道ヲセンスルハ、ヨク色草ハナニモイタ

ツラ事ト、ヨクソコニモチイテ、ウエニ人義五状ヲ

タテ、公ハ公トシ、父母ハ父母シ、ヨク人義ヲシラシ

メンカ^⑫用テ候。ヨク^⑬此心モチ、タイジ

也。ヨク^⑭シアンシテ、モテ地獄候ムソ。

〔空白〕

(8才) 《③萬法不侶》△龐居士問馬大師、不与萬法為侶者、是

什麼人○師云、萬法為侶者ハナンテア

ラウ、弁来。答云、※補入^⑮「自性^{シセウ}デ候。」如虚空者テ候ノ弁也。

師云、如虚空トハ、ナニトテ云来ソ。○答云

カタチ^⑯ク躰モナク、住処モナキニヨツテ、

如虚空者テ候ト弁シ候。師云、目ニ

ミラル、者カ、鼻ニカ、ル、者カ、耳ニ聞ユル

カ、口ニ味イアルカ弁来。耳鼻舌心意ノ

五ツ也。弁也。答云、無体住処モ無ホトニ目ニモ

鼻ニモ耳ニモ口ニモ味アラス無者、耳

(8ウ) 鼻舌心意ノ知レヌ者テ候。○師云、下

語。法身^{ホウジン}無相。○師云、提露シ来レ。答

云、※補入^⑰「洞家ナトニハ、イロ^⑱シカタ有テ歌ナトヲ、ケレト

モ、当家ニハハカリ^⑲ニシカタアルソ。手ヲニキツテ、是ヲ弁云

也。』ケンヲニキツテ云。如虚空ナル者、セウ悪ニ□

■ミチくテ候。○師云、有者カ在キヤル

蕃□。師云、頭上ヲニキリ、キヤツ下ヲスクイ

前後■左右ヲニキツテ云。内チニ有カ、外カ

ニ有カ。○答云、内外ニ重満シテ候。師云、頭上

ニイ。○下語、頭上漫々。師云、キヤツ下ニイ。答

云、キヤツ下漫々。○師云、前後ニイ。下語、在_{カトスハ}前ニ

忽_{コソエトシテ}焉。在_{シテ}後。○師云、左右ニイ。○答云、左右逢_レ源

師云、木カオキトシオカサネソ。弁来。答云、

(9才) 師云、ナニトテ六方ヲサスソ。答云、上■

維、六方ニミチくテ候。上下ハ天地也。四維

東西南北也。天下ヲ頭脚、東西南北ヲ

前後左右ニタトヘテ云ソ。○師云、自性ノ

空ト虚空ノ空ト同カ別カ。○答云、

別テ候。師云、ナニトシテカ別トハミタソ。○

答云、虚空ノ空ハ※補入「無始以来」空ニシヤクくトシテ無念ニ

ナンノ用ニモタ、ス、自性ノ空ハ開悟シテ無

始_シ以来ノリンネ截断シテ、用ニタツ処ヲ

別トミテ候。師云、下語シ来。○答云、

(9ウ) 虚、空ノ空ハ空ニシテ空ナリノ無ナリ。自_レ性ノ空ハ空ニシテ真ナリ。

又此下語モ

ツク。空非_レ性地ニ、性地非_レ空。サテ皆人間モ草

木モ、尽空ヲウケテ生スレトモ、今日開悟シテ

大徹大悟シテカ、自性シヤホトニ別也。空非性

地、性地非_レ空カ別ソ。又サテ虚空、無ナリ。

又自性■開悟シテカラハ真ナリシヤホトニ

別ト見テ候ソ。師云、ヒツ境如何。○答

云、自性ハ天地シユイニミチくテ有

ホトニ一ツヨ。無ニ又無三ト見テ候。無

ニ又無三八、虚空モ自性モ一ツ■

(10才) 云心ソ。師云、下語シ来。○答云、_唯■

事實、餘ニ則非真。是ハ唯一事トハ、本

分ヲ云ソ。事くく、人間生スルモ、水カ氷ニ

ナリ氷カ水ニナルモ、皆空氣カラスル事ソ。

唯此ノ一事、_{タケ}実餘ニツハイラヌ事ヨト云心也。

餘ニハ■生ノアル事ソ。本分カ尽くスルニ

モハラ餘ニイラヌソ。ニニナツテハイラヌ者ヨ。

師云、佛性ニ名ヲツケ来レ。○答云、※「補入」名ハ」吹

毛劍テ候。コ、ニクワシイ弁。吹毛劍ト云ハ

コマカナ毛ヲヤイバノ上ニフルイカクレハ、チリく

キル、ソレホトナツルキノ。サテ、今日開悟シテ
大徹大悟シテ、無始シ以来自性ノリンネヲ截

(10ウ) 断スルホトニ、吹毛劍トツケテ候。卍卍畢畢

当家 洞家ナトテハ、本分上カシレヌ処テ

本分ノ、宿樹ノトハカケトモ、文ヲヤレトモ至

レ家スト27「?儒」語ノ録ニモ、洞家佛法ハ

アルソ。マタ本分上ニサタマラヌ処テ、口

テハ截断■面ニスレトモ、心カセヌニヨツ28

日マチ日マチヲ29、洞家ニハスル。五山ナトハ、ハヤ

イツカウノ無眼僧シヤ。当家ナトデハ

今日ノ上ノ色想ヲヨクモチイテカラ心

ニハナニモイタツラ事ヨト見テ、今日上ヲハ

却テヨク色想ヲタツル。今日ノ上ヲ■

(11オ) ト云テ、佛ニクソヲシカケ、堂神ヲ■

ヨイ者カ。ソレハシツカイ者クルイソ。当家

ノテウ宝ハ、今日ノ上ヲ一段リンネシテ、心ヲ

截断スルソ。大徹セヌ者カ、ナニモナイ、

イラヌ者トイヘトモ、心心ノヨクモチイキラヌ

ニヨツテ■云ソ。師云31、有相法身、無相法

身。法身ハ木分也32。自性ノ佛性ノト、字

ト法身ヲ「?聞」心也。クワシイ大灯ノ弁、有

ホトニクワシウ弁シ来レ。金剛性躰モ本

分ソ。有相法身、無相法身、弁。○答云、

有者ハ無イ者、無イ者ハアル者ト見テ候。

(11ウ) 師云、ナントシテカ有者ハ無者、無イ者ハアル

者ト見タソ。○答云、無者ハ有トハ、虚空

ト云者ハ、天地開閃ヒキウシテ無始以来、日月

皆尽くク古ヨリ、チヒモセス、無キ虚空

ト見タ者ハ有ル。又、有者ハ無者トハ

人間■草木シシラ満「?栽」、尽、皆有者ハ

死スレハ尽く、虚氣へ却テ無者也。本分

ノ句ニモ、風吹不入、水洒不着。野火烧トモ、不

尽、春風吹ニ又タ生ト云句モ此事也。尽く人間ハ

虚氣ヲウケテ、死スレハ又虚氣ニ還ル者■

有ソ。肉コソハ焼ケハハイ、ウツメハ■

(12オ) ナレ、根本ハ虚氣にカヘルニヨツテ不■

ノ境カイソ。死ヌルトテカナシム事ハナイ。

皆尽虚氣に還ルホトニ、寒事モ無ク、

ヒタルイ事モ無ク、一段ヨキノ。是ヲ見性

ト云ソ。見性トハサキノ性ヲミルト云心也。

〔是〕
□見■也。是ヲ見ハ、死スルホト

ニカナシイソ、ナニカカナシイソト云事ナシ。

サテ根本虚気ヲウケタホトニ、又虚

気に還。アノサテ米カ飯トナツテ、夏

ナドハ虫シニナリ、冬ハ水カ氷トナリ

氷カ水トナルモ、事〳〵ク、虚気ヲウケテ

又、氷カ水ニナレハ、本ノ処へ却ルホトニ

〔12ウ〕虚気ト云者ハ、無始以来ナニニモアレ

トモ、スコシモチヒスニ有ホトニ、有者ハ無者、

無者ハ有者ト見テ候。師云、ヒツ境

如何。下語、充塞乾坤、又、亘古亘今

トモ二句ツクソ。充塞乾坤トハ、皆

尽〳〵ク■坤ニミチ〳〵テアルト云心。

亘古一トハ、虚空ハ古モ今モ同事ト

云心也。是カ一第次ノ処ソ。知□性³⁵

ヲトテ一第次也。皆知□性ヲ■

事ハアイマイトイヘトモ、生レテ又■

〔13オ〕却ル処カ□性ソ。是ヲ、トツクリ■

ソコ□ニフマヘテ、参スレハマタウ■

紙ホト明ニナルソ。是レヲ以テ明眼

ト云ソ。真エキ再返アレトモ、事ナカイ

事、マツ是レテスムソ。

《④見明星》※補入「大灯之一冊■有■則也」

佛見明星悟道○下語、三上有

星皆拱如、天上星地下木、二ツ

ツクソ。星ト云者ハ、暮コトニ出テナン

ノトウリモナク無心、人モナンノトウ

リモナク無心ノ処サトラレテ候。

〔13ウ〕大灯云、不審受誰恩力○下語

百華春到為誰開、ツクソ。星ト云者モタニ

■出、暁入ホトニ、ナンノトウリモナク、無心シテ

佛祖不識シヤホトニ、百華春到一トト

ツケテ候。花ト云者モ、時刻カ来レバ花開

ミノリ■ト云事モナク、星ヲ悟道

セラレタモ、誰為ト云事モナイソ。此不審

受誰恩力ハ、大灯ノ学者ニシラシメン

タメニ謂。是ハ大灯ノ一冊ニセラレタソ。

※補入「一先、是テスム。」シンエキアルホトニ心得可。

〔14オ〕《⑤聞擊竹》香巖聞擊竹悟道○下語、不■

寺風送鐘聲来。香巖ノサウジ■

サマニ、カワラノカケニテ、竹ニアテラレタカ
竹カナツテ有処聞テ、ナンドウリモナク
無念無心シテ聲カ有知、悟道セラレタソ。

鐘ト云 ■■■ハ聲ノ有処テ、此句ヲ

ツケテ候、栢樹ニモ如^レ有鐘ノ鉦ニト云モ此心也。

■^是テスム也。

注

① 本文献は長期間二つ折りにされていたようで、折り目にあたる各頁中央の傷みが激しい。表紙が二つに裂けているため、露わになった一丁表中央の六、七行目がささくれている。当該箇所は重ね書きだが、元の文字は殆ど判読できず、わずかに濁音符が確認できる。

② 「師家」は欄外上部の書入れで、「和尚」と線で結んである。

③ 「心（しん）」。「五行目以下の「過去身」等も同じ。

④ 「実（み）」の意か。

⑤ 左傍に書入れ。

⑥ 「そこ（其処）」か。ただし、この書写者は「底前栢樹子」と二箇所であらう。表記しており、「底」と理解していた可能性がある。

⑦ 「しさい（仔細）」。

⑧ 「芥子斗」は、「ケシホトモ」の上に重ね書き。

⑨ 「首楞嚴経」か。

⑩ 「くそ／とくそ、しかけい（糞をしかかけよ）」。「もう一例、「佛ニクソヲシカケル」（11オ）がある。「とくそ」「とぐそ」「どくそ」は未詳。

⑪ 和歌の異同を傍書で示す。「風」は左傍。

⑫ 「花木ヲ」に重ね書きあり。「木ワリ」か。

⑬ 前丁の抹消箇所がほぼ同文で「大、カ」。「謳歌（おうか）」か。

「Voca ヲツカ（謳歌） Via via（謳、歌）歌謡または、詩歌。文書語。」
〔日葡 p. 697〕

⑭ 「色相」。

⑮ 長い線が引かれている。

⑯ 「風花雪月」。

⑰ 「有りたいま、」の踊り字脱か。

⑱ 「ある（居）」か。

⑲ 「曹洞」か。「道」の表記は「神道」等との類推か。

⑳ 「ばけ（に）」は、いかがわしく、奇妙なこと。「ばけばけしい」、「ばけらしい」。「史記ナンドニカ、ルバケラシイ事ヲバ書ルサウス事デハナケレドモ」（史記桃源抄・八3オ）

㉑ 「シ」は「トシ」の脱字か。

㉒ 「仕方（しかた）」、「能や狂言で、それぞれの場に対応した身ぶり手ぶりによる特定の所作」（『時代別国語大辞典 室町時代編』）。

㉓ 「いる（居）」の連用形。以下、師と弟子とが短いやり取りを繰り返す。

㉔ 「空ナリ」と「無ナリ」は双行。

㉕ 「四維」。

㉖ 「もっぱら」の古形。もしくは、「もっぱら」を表記したもの。

㉗ 「文をやれども家（に）至らず」という諺か。他に例を見ない。

㉘ 「テ」脱か。

㉙ 「日待ち」。「正月、五月、九月、十月の十五日の夜などに、潔斎して一晩寝ずに日の出を待って、それを拝む行事。」（『時代別』）「Fimachi. ヒマチ（日待）儀式として、日の出を待つこと。」（日葡 p. 232）

㉚ 「物狂い」。

③1 《萬法不侶》には、複数の問答のパターンが含まれているようで、このあたりから後は、別のバージョンか。

③2 「本分」の誤りか。

③3 「禿ぶ」。すりへる、すり切れるの意。「Chibi. iru, i. uru. ita. chi. jū. bil, または、ブル、ビタ。(下略)」(日葡 p.118)

③4 「あのごとく」、未詳。

③5 示偏・衣偏に「夆」のような字。「法性」、或いは「真性」「心性」を表記したものか。

③6 古本節用集、落葉集に収載される。「Saïen. サイヘン(再返) Futa. tabi. caysu. (再び返す) その物をもう一度繰り返して送ること。」(日葡 p.350)